グローバル情報化とアルジュンさん死亡事件報道

先述のように，アルジュンさん死亡事件の報道，とりわけユーチューブ動画は「衝撃的」であった。十数年前，いやおそらく数年前ですら，こんな動画がネット上に掲載され，世界中に配布され見られることは，まずなかったであろう。
▼小島寛明「【衝撃映像入手】16 人で 1 人取り押さえ手足拘束した警察。検察取り調べ中にネパール人男性死亡」Business Insider Japan, Mar. 29, 2019
関心をもち検索すれば，事件を報じた英文記事も世界中で読むことが出来る。
▼SAKURA MURAKAMI, "Wife of Nepalese man who died during interrogation sues state," Japan Times, Jul 27, 2018
世界はいまや万人監視社会になった。わがアパートですら，玄関，駐車場，駐輪場，ごみ置場などに監視カメラが設置され，四六時中，監視・録画している。アパートに出入りする人はむろんのこと，前を通るだけの人や車，犬や猫やタヌキなど，すべて見られ記録されている。

わがアパートが特殊なのではない。近くの駅や道路，ビルや駐車場はおろか，一般の民家にも，いや走り回る車にすら監視カメラが設置され，常時監視・記録している。他の地域でも，状況は似たり寄ったりであろう。

しかも驚くべきことに，これら監視カメラの映像は，革命的技術進歩により個々人の識別にすら利用可能だ。われわれは，つねに監視され，個人として識別され，記録されているのだ。しかも，それらの情報は，可能的にはネットを介して世界中に配布され利用されうる。いやそればかりか，いったんネット上に掲載されれば，その情報は無数に拡散し，ほぼ制御不能となり，半永久的に残り利用されうる。まさにグローバル監視社会！　ネット情報化社会は，いわば「神の目」をもつに至ったのだ。

この情報化社会では，ネットにつながりさえすれば，世界中，どこからでも世界に向け，映像・音声・文字などの情報を送受信できる。ネパールの地方からでも，つい数年前までは想像もつかないような生の情報がネット上に多数送られ，だれでも閲覧可能となっている。神秘の国，秘境など，もはやどこにもない。

日本の留置場や拘置所も，このグローバル情報化から免れることは，もはやできないであろう。監視カメラが設置されておれば，その映像は，どこかから流出し，ネット上に掲載され，世界中に拡散される可能性がある。そして，いったん拡散すれば，もはや取り消しは不可能！

アルジュンさん死亡事件の「衝撃映像」がどこから入手されたのか，私には全くわからないが，すでに「Business Insider Japan」や「ユーチューブ」などに掲載され，世界中に拡散している。可能的には，世界中の人々が，いつでも，どこでも見ることが出来る。もちろん，アルジュンさんの郷里，ネパールの人々にも！

アルジュンさん死亡事件の裁判は，世界中から，とりわけネパールの人々により，見られている。

【参照】Kanak Mani Dixit : In Nepal, 91% of individuals now own at least one mobile device, almost half of them smartphones.

■Nepali Telecom, 12 Mar 2019 / Nepali Times, 12 Apr 2019

谷川昌幸(C)

2019/04/15 at 15:28

カテゴリー: 司法, 情報 IT, 人権

Tagged with アルジュン, 監視社会, 外国人労働

アルジュンさん取調中死亡事件，続報

アルジュンさん取調中死亡事件の続報が，Business Insider Japan（2019 年 3 月 29 日）に掲載されている。

・小島寛明「【衝撃映像入手】16 人で 1 人取り押さえ手足拘束した警察。検察取り調べ中にネパール人男性死亡」Business Insider Japan, Mar. 29, 2019
アルジュン・バハドゥル・シンさん（死亡時 39 歳）は，ネパールから料理人として来日，ネパール料理店で働いていたが，2017 年 2 月頃失職，ホームレス状態になった。同年 3 月 13 日，他人名義クレジットカード所持などを理由に新宿署に連行され，14 日逮捕された。

翌 15 日朝，アルジュンさんは留置場で暴れたとして十数名で取り押さえられ，戒具で身体を強く拘束，そのまま検察に送られた。ところが検察取り調べ中，体調に異変が生じたため午前 11 時頃戒具を外したところ，彼は午後 3 時前，急死してしまった。

アルジュンさんの妻は 2018 年 7 月 26 日，不当な強制的拘束により夫を死に至らしめた業務上過失致死の疑いで新宿署に刑事告訴した。また翌 27 日には，注意義務違反を理由に東京都を相手に慰謝料を求める訴えを東京地裁に提出した。

この事件の上記 3 月 29 日付続報には，アルジュンさん取り押さえ，戒具拘束の状況を記録した東京都提出証拠映像が添付されている。タイトル通り，**衝撃的な映像**だ。
⇒⇒【衝撃映像】取り調べ中にネパール人はなぜ死んだ。留置場で何が起きたのか
アルジュンさんはなぜ逮捕後，取調中に死亡したのか？　外国人の，いやひいては日本人自身の生命権をはじめとする基本的人権を守るためにも，裁判を通してアルジュンさん死亡の真相が，あますところなく徹底的に解明されるべきである。

▼戒具拘束されるアルジュンさん（東京都提出証拠映像，YouTube）

【参照】
・小島寛明「ネパール人男性はなぜ死んだ。「移民」はいないが外国人労働者に頼る日本といびつな入管制度」Business Insider Japan, Sep. 12, 2018
・「手錠で拘束されたネパール人、検察の取調べ中に突然死…妻「真実知りたい」と提訴」弁護士ドットコム，2018 年 07 月 27 日
・SAKURA MURAKAMI, “Wife of Nepalese man who died during interrogation sues state,” Japan Times, Jul 27, 2018
・小島寛明「東京地検の取り調べ中に死亡のネパール人、遺族が検察官ら告訴」，Business Insider Japan, Jul. 26, 201

谷川昌幸(C)

2019/04/10 at 16:35
カテゴリー: 経済, 労働, 司法, 人権
Tagged with Arjun Singh, アルジュン, 外国人労働

桜の宝塚

7日の日曜は，絶好の花見日和。最近は身内の介護で遠出できないので，自転車で近くの桜を見に行ってきた。

今年の桜は，完璧な一斉開花。美しいというよりは，たじろぎ，息をのむほどの生命力の噴出発現。その一気に咲いた無数の花々を見ると，いやでも散り際の潔さ，美事さを思わずにはいられない。

桜は，厳しい冬を耐え忍び，本格的な春の到来を待ち望む日本人の心情に，たしかに最も自然に，最も力強く訴えかける日本の花である。それだけに，利用価値も，むろん絶大だったのだが‥‥。（参照：花の宝塚とゼロ戦と特攻顕彰碑）

■「宝塚大歌劇場・花のみち」入口／宝塚大歌劇場

■花のみち（歌劇場前）

■宝塚音楽学校（TMS)／阪急電車

■宝塚大橋東詰／同左

■宝塚大橋西詰／伊和志豆神社

■平林寺／同左

谷川昌幸(C)

2019/04/08 at 10:46

カテゴリー: 自然, 宗教, 平和, 文化

Tagged with 特攻, 宝塚, 桜, 歌劇

ゴビンダ医師のハンスト闘争(29)

7．ハンスト：開始から終了まで

(1)ジュムラでハンスト開始

(2)体調悪化

(3)ゴビンダ医師支持の拡大

(4)カトマンズへの強制移送

ゴビンダ・KC 医師が，「医学教育令 2017 年」の継承発展たる「医学教育法」の制定を求めジュムラでハンストを開始したのに対し，オリ共産党政府は，医療格差象徴の場として選ばれたジュムラでの交渉を忌避，彼を首都カトマンズに連れ戻し，そこで説得しハンストを止めさせようとした。政府側は次のように主張した（19 日カトマンズ移送後報道も含む）。

オリ首相：①「納税者のカネから給料をもらっている者が，自分に割り当てられた義務を果たしもせず，政府を独裁的などと，どうして非難できるのか？」（7月9日頃，官邸での第2州共産党議員との会談において*46）。②「KC 医師は，問題解決ではなく，問題をつくり出そうとしてきた。」そして，様々な勢力がそれを利用し，彼の治療を妨害してきた。医者や公務員が職務を放棄して街頭に出てよいのか？医学教育法は，議会で審議すれば，修正に応じる用意はある。（7 月 24 日付報道*47）

プラチャンダ共産党共同議長：KC のハンストには慣れっこ。政府は彼の生命を救おうとしているのに，反民主的勢力が彼を殺そうとしている。一個人の街頭運動で決められてしまうのなら，政府も議会も不

要。反革命勢力がKCを政治的に利用している。コングレス党はKCの死体を踏みつけ利用するような恐ろしい政治をするつもりか。（7月24日付報道　*47）
GM・ポカレル教育大臣：①医学教育法は議会提出済。「座り込みで何でも変えようとする伝統は終わりにしなければならない。議論してはならないことは何一つないが，解決はハンスト以外の方法で見出すべきだ。」（7月10日付報道*48）②「KC　は主権的上院に圧力をかけ自分の命令に従わせようとしているが，これは許されないことだ」（7月11日付報道*49）③7月13日，KCを強制的にカトマンズに連行することもありうると発言（7月17日付報道*50）④7月14日ジャーナリスト協会でのコメント。政府はKCの生命を救いたいと考えている。「天候の回復を待っている。拒否されても，KC医師をここカトマンズに連れてこざるをえないかもしれない。」（*51）
政府は，このような対KC強硬姿勢を維持しつつも，U・ヤダブ保健大臣が7月6日，医師2名，看護師数名をジュムラに派遣した（*52）。が，KCは，地元ジュムラの医師らに看てもらうとして彼らを拒否，退去を要求した（*52,53,54）。また，政府側はKR・バラル教育省事務局長を長とする政府交渉団を派遣したが，この交渉団は政府方針通りKCにカトマンズ帰還を要求するだけであったため，実質的な交渉には入れなかった（*55,56）。

そうこうするうちに，KC支持運動はますます拡大・過激化，政府は追いつめられKCのカトマンズ移送強行に急傾斜していった。カルナリ州政府が7月17日，KAHSでは治療困難だとしてKCのカトマンズ移送を中央政府に要請したのも，おそらく中央政府のそうした意向を受けてのことであろう（*57）。そして，ついに7月19日午前8時ころ，政府はKCカトマンズ移送を発表，軍ヘリをジュムラに派遣した。ヘリは同日午前9時半ころジュムラ軍駐屯地に着陸。（*58）

このヘリによるKC移送の知らせを受け，KC支持派はハンスト中のKAHSに多数集結，移送を阻止しようとした。彼らは，KCに移送を伝えるため訪れたカルナリ州のMB・シャヒ首相，N・バンダリ内務法務大臣らを阻止し，追い返した。

そこで郡当局（B・パウデル郡長）は，治安部隊にKC連行を命令した。抵抗する者には射撃も許可したという。銃使用については，警告はしたが，実際には実弾は発射されなかったようだ。催涙弾は使用。それでも，KAHS付近での激しい衝突により，40名にも及ぶとされる多数の負傷者が出た。（*58,59）

この衝突の知らせを受けたゴビンダ医師は，苦渋の決断を迫られた。彼は，要求が通らなければカルナリで死ぬ覚悟だと繰り返し明言していた――
「ニュース報道によると，政府は私をカトマンズに連れていくためヘリコプターを送るそうだ。私は，この聖なるカルナリの地で死を迎える覚悟をしており，カトマンズには私の要求がすべて受け入れられるまで帰るつもりはない。」（*60）
「7項目要求が満たされなければ，カトマンズには戻らない。たとえ死ぬことになろうとも，ここジュムラで死ぬことを選ぶ。」（*61,62）
ゴビンダ医師の決死の覚悟は，このように明確だったが，それではなぜ彼は，結局はカトマンズ移送に同意したのか？　理由はただ一つ，当局の強硬な実力行使によりKAHS周辺に結集していたKC支持

派や治安部隊に多数の負傷者が出始めたこと。当局側は，拡声器を使い，衝突で警官死亡と放送したとさえ言われている。この放送はウソで，実際には警官は釘でけがをしただけだったようだが，もしそうした放送があったのであれば，KC にも聞こえていたであろう（*63）。KC は，こうした犠牲者続出の知らせを聞き，カトマンズ移送への同意を決断せざるをえなくなった——

MB・シャヒ州知事に対し，KC はこう訴えた。「暴力を止めよ，病院破壊を止めよ。こんな暴力を引き起こすくらいなら，カトマンズへ行く。」（*58）

こうして KC は 7 月 19 日，軍ヘリに乗せられ，スルケット経由でカトマンズ（トゥンディケル）へ運ばれた。当初，政府は，KC を近くのビル病院に収容する予定だったが，これには KC が断固抵抗，結局は彼の勤務先であるトリブバン大学教育病院（TUTH）に移送した（*64,65）。午後 4 時，KC 移送作戦完了（*58）。

TUTH に収容されたゴビンダ医師は，ここでハンスト闘争をさらに継続することになる。

ジュムラ(jumlanepal.blogspot.com)

*46 “Height of cruelty,” Republica, July 9, 2018
*47 “Oli, Dahal spit venom at NC, Dr KC,” Republica, July 24, 2018
*48 “Dr KC rejects PM’s proposal for one-on-one by phone,” Republica, July 10, 2018
*49 “Centre continues to ignore Dr KC’s plight,” Kathmandu Post,Jul 11, 2018
*50 “Govt at last forms team for talks with Dr KC,” Republica, July 17, 2018
*51 “Dr KC to be brought to Capital forcibly: Minister,” Kathmandu Post, 2018-07-14
*52 “Rights bodies urge govt to take care of Dr KC,” Republica, July 6, 2018
*53 DB BUDHA, “Dr KC refuses to see docs from Kathmandu,” Republica, July 6, 2018
*54 Devendra Basnet/DB Budha, “Choice of Jumla was to draw govt attention to Karnali: Dr KC,” July 8, 2018
*55 “Govt forms talks panel led by Education Secy Baral,” Republica, July 16, 2018
*56 “Dr KC says govt is indifferent,” Republica, July 19, 2018
*57 “Dr KC appeals for medical attention,” Republica, July 17, 2018
*58 “40 injured in clash as Dr KC taken by force to Kathmandu,” Republica, July 20, 2018
*59 “Dr KC airlifted from Jumla,” Republica, July 19, 2018
*60 “Fasting surgeon refuses to leave Jumla,” Kathmandu Post, Jul 12, 2018

*61 Devendra Basnet/DB Budha, “Dr KC refuses medication,” Republica, July 10, 2018
*62 “Dr KC’s supporters to foil govt plans to airlift him to capital,” Republica, July 14, 2018
*63 “Police duped Govinda KC,” Nepali Times, August 3, 2018(Onlinekhabar, 30 July)
*64 “Dr KC brought to Surkhet,” Republica, July 19, 2018
*65 “Chopper carrying Dr KC landed at Tudikhel; rushed to Teaching Hospital,” Republica, July 19, 2018

谷川昌幸(C)

2019/04/06 at 18:21

カテゴリー: 健康, 政治, 教育, 民主主義

Tagged with ゴビンダ・KC, ジュムラ, ハンスト, 医学教育